

言葉に関心を持つと、ものの見方が変わってくる

～未来の「先生」に言葉の大切さを伝える帝京平成大学の教育～

帝京平成大学
横田雅史教授

ライター 上村雅代

帝京平成大学、現代ライフ学部児童学科学科長の横田雅史教授に、日本語検定の活用と効果について伺いました。

横田教授が学科長を務める児童学科には、「小学校・特別支援コース」と「保育・幼稚園コース」の2つのコースがあります。学生たちは小学校・特別支援学校教諭、保育士・幼稚園教諭を目指して学びを深め、教育実習を迎えます。

同学では、その教育実習に行くための条件に、「日本語検定準3級以上の合格証を提示すること」が定められています。「先生」として世に出て行くために、最低限必要な日本語力を測っているのです。

児童学科では、卒業生を送り出して5年目を迎えています。児童学科の学生は、子どもとの関わりが積極的であり、丁寧であると言われ今後もその力を伸ばしていきたいと取り組んでいます。

以前から漢字の学習に力を入れていたが、「あるとき先生方の話し合いの中で日本語検定を導入したい、という話が持ち上がりました」。漢字が書けるということも大切だが、それ以上に、日本語を正しく使えることが大事。日本語学習こそ、教職に就く者に必要であるとして、日本語検定の導入が決まりました。

「学生に言葉の大切さを伝えたい。それが資格に繋がればなお良い。日本語検定のお陰で学生の力が付いてきていることが目に見えるんです」。

検定を意識することで、学生たちが日本語に関心を持つきっかけに繋がっているといいます。

「心を大切にすると同じように、日本語を大切にしなければなりません」。

日本語は生活の中に、その根っこがあります。四季・気候・自然を織り交ぜた美しい言葉なのです。「言葉は人の生活と共にあるものであり、言葉が変われば意識が変わる」と教授。

横田教授が言葉を意識し始めたきっかけは、40数年前の、「実践的カウンセリング」を実践する師匠との出会いに遡ります。

「私がひと言、聴き漏らしたら、（師匠が）横田君、レスポンス！」と言うのです。「君、何を考えているの？言葉は言霊、人が魂を音にして現しているんだよ。それを聴き逃したとは何事だ」と説教を受ける。また、相手の言葉を最後まで聴かないで自分の想いを乗せて返すと、「君、今彼は何と言った？それは君の思い・考えでしょう。何故まず彼の思いを聴かないんですか」となる。20年近く指導を受けたといいます。

「物に名前が付いて、はじめて考えられるのです」。

道端の草を「ぺんぺん草」と名付けたり、「月見草」と名付けたりする。どうしてこの花にその名前をつけたのか。そこに日本人の細やかな心遣いがあり、日本語の美しさがあるのです。

言葉に関心を持つことは、生活に関心を持つことです。物の見え方が代わり、自分の感じ方も変わってきます。

よく「自分探し」と言いますが、自分を知ることは、人生でとても大きな意味を持ちます。人は名前を付けられて、初めてその人になります。「人を知るということは、知ろうとしている自分を知ること」であり、その原点は、やはり言葉なのです。

児童学科の学生は、これから先生として世に出て、未来を生きる子どもたちを育てていく卵です。その「未来の先生」に日本語の大切さを教える帝京平成大学の指導は、日本の未来にとって大きな宝であるに違いありません。



上村雅代(かみむら まさよ) プロフィール

ライター。1980年8月7日生まれ。芥川賞作家・荻野アンナ氏の助手として働きながら文章の研鑽を積む。『大震災 欲と仁義』荻野アンナとゲリラ隊(共同通信社)共著。現在、息子の育児奮闘中。最近では、人気アイドルグループNMB48のラジオ番組のシナリオを担当する等活躍中。